

ル所ニ背カサルヘケン  
同上

朕徒ラニ九重ノ中ニ安居シ一日ノ安キヲ偷ミ百年ノ憂ヲ忘ル、トキハ  
遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦シメン事ヲ  
恐ル故ニ朕コ、ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ  
艱難辛苦ヲ問ハズ親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤  
ヲ開拓シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置カンコトヲ欲ス  
崇神天皇四年詔

○惟れ我が皇祖諸天皇の宸極しるしめすこと豈一身の爲ならむ。  
光仁天皇の宣命

○高御座天の日嗣の座は吾れ一人の私の座にあらずとも思ほしめす。  
嵯峨天皇

○大寶は是れ至公の器、天下は一人の有にあらず。  
明治天皇詔

○神器ハ天祖威靈ノ憑ル所歴世聖皇ノ奉シテ以テ天職ヲ治メタマフ所ノ  
モノナリ。  
元正天皇養老六年詔(續日本紀)

○朕詳に布政の方を思ふに仁恕の典より先なるは莫し。故に賑恤の惠は  
遐方を隔つることなく、撫育の仁は普く禹内に覃ばせり。今者有司奏言  
すらく、諸國の罪人惣べて四十一人法に准すれば竝に流已上に當る者な  
りと。此の奏を聞く毎に朕甚だ之れを慙れむ。萬方幸あらば余一人に在  
らむ。宜しく奏する所の罪人竝に坐に従ふ者を成く皆放免すべし。案檢  
すること勿れ。  
聖武天皇詔(日本紀)

○朕不徳を以て何ぞ獨り天下を受くるに堪へん。共に悦び恒典を理久し  
孝子、順孫、高年、鯨寡憐獨及び自存し能はざる者に賑給すべし。  
後醍醐天皇御製

世をさまり民やすかれと祈るこそ我が身につきぬ思ひなりけれ  
櫻町天皇御製

身の上は何か思はん、朝な朝な、國安かれと祈る心に  
後嵯峨天皇御製

久方の天よりおろす玉銚の道ある國ぞ今の我が國  
龜山天皇御製

世の爲に身をば惜まむ心とも荒ぶる神は照し覽るらむ  
末の世の末の末まで我が國は萬づの國にすぐれたる國  
伏見天皇御製

いたづらに安き我が身ぞ恥かしき苦しむ民の心思へば  
後醍醐天皇御製

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治めがたきを  
後龜山天皇御製

あつめては國の光となりやせむわが窓てらす夜半の螢は  
後花園天皇御製

思へたゞ空に一つの日の本に又たぐひなく生れこし身を  
後水尾天皇御製

祈りおく千年は世々に盡きもせじありとあらんの一つ心に  
雲元天皇御製

天照らすひかりに見よや日の本の外までおよぶ神の惠は  
へだてなき我が日の本の光をばあだし國まで仰がざらめや

後宇多天皇御製

いとまた民安かれといはふかなわが身世に立つ春の始は  
光格天皇御製

○仁人は敵なし。  
○仁人の以て事とする所のものは、必ず天下の利を興し、天下の害を除  
き去る事、此れを以て事となすものなり。  
○仁は人なり。合せて之を言へば道なり。  
○仁と徳とは吾人を神に均しからしむ。  
○王者は四海を以て家となし、兆民を以て子となす。  
○力を以て仁を假るものは弱たり。徳を以て政を行ふものは玉たり。

○仁を祖とする者は玉たり。義を立つる者は弱たり。兵を用ひて窮する  
者は亡ぶ。  
○惠を四海に施し、深く民を憐むを仁といふ。  
○民を子とし、國を治むるは重事なり。  
○民は惟邦の本、本固ければ國寧し。  
○天下を保ち國土を治むる謀は文を左にし武を右にす。  
○天子は四海を以て家とす。  
○天の君を立つることは是百姓の爲なり。然れば則ち君は百姓を以て本  
と爲す。是を以て古の聖王は一人も飢乏寒かれば顧みて身を責む。今百  
姓貧しきは則ち朕が貧しきなり。百姓富みなば則ち朕が富なり。未だ百  
姓富みて君の貧しきことあらじ。

○天は兆民を子とす。

○仁を祖とする者は玉たり。義を立つる者は弱たり。兵を用ひて窮する  
者は亡ぶ。

○惠を四海に施し、深く民を憐むを仁といふ。

○民を子とし、國を治むるは重事なり。

○民は惟邦の本、本固ければ國寧し。

○天下を保ち國土を治むる謀は文を左にし武を右にす。

○天子は四海を以て家とす。

○天の君を立つることは是百姓の爲なり。然れば則ち君は百姓を以て本  
と爲す。是を以て古の聖王は一人も飢乏寒かれば顧みて身を責む。今百  
姓貧しきは則ち朕が貧しきなり。百姓富みなば則ち朕が富なり。未だ百  
姓富みて君の貧しきことあらじ。

○天は兆民を子とす。

○仁を祖とする者は玉たり。義を立つる者は弱たり。兵を用ひて窮する  
者は亡ぶ。

○惠を四海に施し、深く民を憐むを仁といふ。

○民を子とし、國を治むるは重事なり。

○民は惟邦の本、本固ければ國寧し。

○天下を保ち國土を治むる謀は文を左にし武を右にす。

○天子は四海を以て家とす。

日本書紀(仁德紀)  
十訓抄

○天下に君として以て萬民を治むる者は、之を蓋ふこと天の如く、之を  
容るゝこと地の如く、上驕心ありて以て百姓を使へば百姓欣然として天  
下安らかなり。

○天を以て大と爲す。之に則る者は聖人なり。民を以て心と爲す。之を  
育ふ者は仁后なり。

○民を導くの本は教化にあり。

○大人時を馭むる、徳を以て本と爲す。明王世に應たる、遠きを懐くる  
を是崇ぶ。

○乃ち神乃ち聖なり。

○政道と云ふは國を治め人を憐み、善惡親疎を分たず、撫育するを申す  
なり。

○食の本たること、是民の天とする所なり。時に隨つて策を設くるは治  
國の要政なり。

○四海風を望んで悦び、萬民徳に歸して樂しむ。

○古の政を爲すや、人を愛するを大なりと爲す。

○徳日に新なれば萬邪惟れ懐く、志自ら滿つれば九族乃ち離る。

○民を養ふこと子の如くし、之を蓋ふこと天の如くし之を容るゝこと地  
の如くす。

○大仁は近きを愛して以て遠きに及ぼす。

○仁者は好みて人を合し、不仁者は好みて人を離す。

○善政は善教の民を得るに如かず。善政は民之を畏れ、善教は民之れを  
愛す。善政は民財を得、善教は民心を得るなり。

○君主臣下を愛し給ふは御子の如く、臣亦君に仕へ侍るも父母を慕ふが如  
くす。

日本書紀(元正紀)  
太平記

日本書紀(神武紀)  
太平記

日本書紀(崇神紀)  
太平記

日本書紀(仁德紀)  
太平記

日本書紀(元正紀)  
太平記

日本書紀(神武紀)  
太平記

日本書紀(崇神紀)  
太平記

日本書紀(仁德紀)  
太平記

いなければ君は天にいて臣は地にいて天地と久しかる可し。倭論語  
○千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とましまし  
て、天つ神の御心を大御心として神代と今とへだてなく、神ながら安國  
と平らけく所知看しける大御國になもありければ古への大御世には道と  
いふ言舉もさらになかりき。  
本居宣長(直毘靈)

國民精神・大和魂・大和心

明治天皇御製

世の中に知られていよ、磨かなむ我が敷島の大和魂  
平かに世はなりぬとて敷島の大和心よ撫まざらむ  
敷島の大和心をみがけ人今世の中に事はなくとも  
廣くなり狭くなりつゝ神代より絶えせぬものは敷島の道  
一筋をふみて思へば千早振神代の道も遠からぬかな  
敷島の大和島根の教へ草神代の種の残るなりけり  
親しみの重なるまゝに外つ國の人も心をへだてざりけり  
四方の海みなはらからと思ふよに波風の立ちさわぐらむ

大正天皇國民精神作興ニ關スル詔書中の一節

國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國  
本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ  
基キ淵源ニ遡リ皇祖祖宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又  
臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘ  
リ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サル  
ナシ  
敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花。  
本居宣長

○たとひ身は武藏の野邊に朽るとも留め置かまし大和魂。 吉田松陰  
○かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂。 同 上  
○しきしまの道は一つを女なりとてなに劣るべきやまとだましひ。 兒島草臣母

○引きつれて歸らぬ旅に行く身にもやまと心の道はまよはじ。 武田彦右衛門妻幾  
○誰が身にもありとは知らず恐ふめり神のかたみのやまとだましひ。 野村望東尼  
○浮雲のかゝるもよしやものゝふのやまとごころの數に入りなば。 同 上  
○武夫の大和心をより合せ末一筋の大綱にせよ。 同 上

忠君・愛國

明治天皇御製

なりはひはよしかはるとも國民の同じ心に世を守らなむ  
國を思ふ道に二つはなかりけり軍の場に立つも立たぬも  
國の爲いよ／＼はげめ千萬の民も心を一つにはして  
志す方こそかはれ國を思ふ民の誠は一つなるらむ  
國民の一つごころに仕ふるもみおやの神のみ恵にして  
○至公私なきは國士の常風、忠を以て君に事ふるは臣子の恒道。  
續日本紀  
○凡そ王土にはらまれて、忠をいたし命をすつるは人臣の道、必ず之を  
身の功名と思ふべきにあらず。  
北畠親房(神皇正統記)

○人君を養ひて祖業を續ぎ、臣民にして父の志を繼ぎ、君臣一體、  
忠孝一致、唯吾國を然りと爲す。 吉田松陰

○忠孝は名教の根本、臣子の大節にして忠と孝とは途を異にするも歸を  
同じうす。父に於ては孝と曰ひ、君に於ては忠と曰ふ。我が誠を盡す所  
以に至りては一なり。 藤田東湖

○日本國民は男女を問はず、國家の獨立自尊を維持するが爲に生命財産  
を賭して敵と戦ふの義務あるを忘るべからず。 福澤諭吉

○忠とは其の心を一にするの謂なり。國の本たる忠にあり。 忠は能く君  
臣を固くして、社稷を安んじ、天地を感じ、神明を動かす。 馬融(忠經)

○大日本神代かかけて傳へつゝ雄々しき道ぞたゆみあらすな。 加茂季鷹

○青海原潮の八百重の八十國につきて弘めよこのまさ道を。 平田篤胤

○すべらぎはあまつ神なり秋津洲動くべき世のあらむと思ふな。 香川景樹

○山はさけ海はあせなむ世なりとも、君にふた心我あらめやも。 源實朝

○君の爲め世の爲め何か惜しからん捨ててかひある命なりせば。 宗良親王

○國の爲め君の爲めとし思はずば雪も螢も何かあつめん。 蒲生君平

○大君の任のまにまにひとすぢに仕へまつらむ命死ぬまで。 三條實美

○ふして思ひ起きて數ふる萬世は神ぞ知るらむ我が君のため。

○老ひぬれが同じ言こそせられけれ、君は千代ませ君は千代ませ。 素性法師

○唐土も天の下にぞ有りと聞く照る日の本を忘れざらなむ。 源 順

○ありて身の甲斐やなからむ國の爲民の爲にと思ひなさずば。 入唐の僧 成尋法師母

○武夫の上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ。 宗良親王

○眞に徳と稱すべき意思は國家觀念と人道觀念とによりて、定めらるゝも  
のなるを要す。 佛 諺

○如何なる民族に取りても亦如何なる社會状態に取りても 恒久の保證と  
なるものは他に一物もなし。唯彼等民族が其の生れし國土に對する愛情  
に依り各自の胸中に燃したる精神あるのみ。 ラスキン

○愛國心は國家的永存の命脈的條件なり。 カイテイス

○愛國心は相互的受難に際しても亦相互的成功に際しても同様喚起せ  
らる。 ビーコンス・フィールド侯

○愛國心はその根を本能及び情緒の奥深く有す。 國家愛は子としての愛  
の延長擴大なり。 ライールド

○我等の父母、我等の子女、我等の親族及び我等の交友等は親愛なり。  
されど此等に對する我等の愛情は悉く我等が生れし國土に對する愛情の  
中に包含せらる。 シセロ

○幼兒は眼を開くと第一にその自國を見、やがて死ぬまで一生涯を通じ  
て其の國だけを見なければならぬ。 佛 諺

○愛國心は大綱領の上に打ち建て、偉徳に依つて支持せらるゝを要す。  
 〇其の愛國心がマラソンの平野に於て昂進すべくもあらず、又其の信心がイオナの廢墟に入つて白熱すべくもあらざる如き男子は殆んど一顧に價ひせず。

○愛國心は惡漢の最後の隠れ家なり。  
 〇賢者は其の身の死を悲まずして、其の國の衰ふことを憂ふ。

○天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れ家て樂しむ。

四海同胞

○萬物は皆大本より生ずれば四海の人悉く連れる枝なり。中江藤樹  
 ○死生命あり、富貴天にあり、君子は敬して失ふことなく、人と共に恭つて、禮あらば四海の内みな兄弟たり君子何ぞ兄弟なきを患へん。

○天下の人皆同胞なり。我れ當に兄弟の相を著くべし。天下の人皆賓客たり。我れ當に主人の相を著くべし。兄弟相愛し、主人相敬するなり。

○地球上立國の數少なからずして各々宗教、言語、習俗を異にすといへども其の國人は等しく同人類の人間なれば、之と交はるには苟くも輕重厚薄の別あるべからず。自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するものなり。

○民は吾が同胞なり。張橫渠(近思錄)  
 ○他國の人汝等が國に居留して、汝等と偕に在らば、之を虐ぐるること勿

れ。汝等と偕に居る他國の人をば、汝等の仲間に住れたる者の如くし、己の如くに之を愛すべし。  
 〇汝等常に兄弟相愛の心を存すべし。又旅人を接待することを忘るゝ勿れ。或人々は斯く行ひて、知らず識らず天使等を招したり。  
 〇凡そ何れの地たるに論なく、孤獨主義大に行はれて人々たゞ自己の事のみを圖り、その思想、自己の外に及ばざる時は、その社會は、殆んど成立すること能はず。  
 〇骨肉枝葉に縁る。交を結ぶことまた相因る。四海皆兄弟。誰か行路の人たらん。況んや、我が連枝の樹一身を同じうするをや。

正義・人道・仁義・仁愛・道

〇人間は人道以上に氣高きものを發見し得ず。  
 〇彼等も自分と同じく人である。

〇凡て他人に爲さんとすることは先づ自ら己にその如くなすべし。

〇窮鳥懐に入れば獵師も之を捕らざる。  
 〇愛は凡ての人を平等ならしむ。

〇仁者に敵なし。

〇四海は兄弟なり。凡そ宇内の生民は人種の如何に關せず、宗教の異同を問はず、皆これ同胞なり。人類の義務は人と人と相愛し、國と國と相隣りて、世界の平和を全うし、幸福を遂ぐるに在り。此の義務を名づけて人道と稱す。……そも、世界の平和を指導し、人道を擁護するは、

我が日本帝國の天職なり。我が日本國民の理想なり。此の理想を實現し、此の天職を遂行するを以て、國民の本務とせんか。乃ち我が日本の國光を宇内に發揚し、我が天皇の仁徳は萬邦に光被するに至らん。

大隈重信(國民讀本)  
 ○地球上立國の數少なからずして、各々の宗教、言語、習俗を異にすと雖も、其の國人は等しく同人類の人間なれば、之と交はるには苟くも輕重厚薄の別あるべからず。自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するなり。

○正義の支配する所には武器の必要を見ず。  
 ○正義ほど崇高偉大なる美德なし。  
 ○正義は實行に於ける眞理である。

○正義と共に生活する人は、何れの處に居るも安全なり。  
 ○正義は人類社會に於ける神聖の綱紀である。

○仁慈よりも正義が凡ての社會の基礎。  
 ○正しき事を爲せ。而して人を恐るゝな。

○正義によつて立て。汝の力は二倍せん。  
 ○何人が戦ひ、何人が倒るゝも正義はとこしへに勝ちて變ることなし。  
 ○正義の味方に戦ふ者は假令十度百度屠らるゝとも神これに勝利の桂冠を與へ賜はん。  
 ○戦争は人道を強むる燒錢療治なり。  
 ○若し正義にして滅びんには人は此の世に住む要なからん。  
 ○仁徳は正義を土臺としたる殿堂なり。この根柢なければ此の頂上を有

する能はず。  
 〇邪は正に勝たず。  
 〇正義の支配する所には武器の必要を見ず。  
 〇神は正義を保護す。  
 〇正義は國民の常食なるも、之を飽食せるものなし。  
 〇腕力は正義の前行く。  
 〇正義は最強者と共にあり。  
 〇勝てば官軍負くれば賊。  
 〇力は正義を知らず。  
 〇力の伴はざる正義は無効なり。正義の伴はざる力は暴政なり。  
 〇正義の愛は大多数の人々に取りては不正義を與へらるゝ事に對する恐怖に外ならざるなり。

- ラスキン 邦 誌
  - 佛 誌
  - ホーミー 佛 誌
  - 獨 誌
  - 同上
  - 邦 誌
  - 佛 誌
  - 巴斯カル
  - ラ・ロシー 佛 誌
  - 英 誌
  - 獨 誌
  - 邦 誌
  - 孔子(論語)
  - 孟子
  - 伊藤仁齋
  - 同上
- 〇仁の徳は愛を以て體とす。故に其の寛にして偏ならず。楽しんで憂へず。衆徳自ら備はる。皆一の愛より流出して自ら衆徳を成すが故なり。

仁は心徳なり。其之行ふ術も亦獨り己が心を盡くして以て之を人に推すにあるのみ。則ち亦至近なり。至易なり。然れども、擴めて之を充つるときは則ち六合に彌り、萬物を貫く。是れ聖人の道なる所以なり。

中村惕齋(仁愛説)

夫れ天地の大徳を生といひ、人心の全徳を仁といふ。其の理一なり。聖人の天に繼いで人を治むる所以の道、學者の義に則り己れを修むる所以の法、豈他あらんや。仁を尙ぶのみ。

孔子(論語)

吾が道一以て之を貫く。

同上

夫れ道は一のみ。

孟子

道は天下の公道なり。學は天下の公學なり。孔子孟子の得て私する所に非ず。博く天下の善を取るべし。

安積良齋

夫れ學者より之を見れば固より儒あり佛あり。天地より之を見れば、本と備なし佛なし。唯其れ一道のみ。所謂道といふもの即ち天地の公道にして、一人の得て私する所にあらず。聖人と雖も、能く之を損得することなきなり。

伊藤仁齋

神道と聖人の道とは名こそ變りたれども、同じく人道にして三綱五常の道にもれず。

熊澤蕃山

誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。

禮記

夫れ天地の道は誠のみ。

王陽明

天の命する之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教と謂ふ。道なるものは須臾も離るべからざるなり。離るべきは道にあらざるなり。

中庸

道は人に遠からず。人の道を爲して人に遠ければ以て道と爲すべからず。

同上

古への人は民と偕に樂しめり。故に能く樂しみたり。孟子

孟子

天下は一人の天下に非ず。乃ち天下の天下なり。天下の利を同じうする者は天下を得。天下の利を擅にする者は天下を失ふ。太公望

太公望

人と愛ひを同じうし、樂を同じうし、好を同じうし惡を同じうするは義なり。

同上

衆と好を同じうすれば成らざることなく、衆と惡を同じうすれば傾かざることなし。三略

三略

凡そ天地の間に生ずる者は未だ相親比せずして、能く自ら存する者あらず。易經

易經

己立たんと欲すれば人を立て、己達せんと欲すれば人を達す。孔子(論語)

孔子(論語)

私自身の生命を支へ、そして又他人の生命を支へんが爲に私の全存在を以て働け。トルストイ

トルストイ

他人を助けて吾人は自ら利す、吾人は他人の傷を纏帯して吾人の傷を治す。アマブローズ

アマブローズ

互に相愛せよ。然らば精神上の結合を得べし。西諺

西諺

他人に盡す正義はやがて己に對する恩恵となる。西諺

西諺

人は他の爲に存在す。他を矯正せよ。然らずんば忍容せよ。西諺

西諺

人の不幸を見て自ら戒むる者は幸なり。

西諺

善は人に施すによりて増す。ミルトン

ミルトン

道は徳を明かにする所以なり。徳は道を尊くする所以なり。孔子(家語)

身を修むるに道を以てし、道を修むるに仁を以てす。中庸

道は人倫日常の當に行ふべき路なり。伊藤仁齋

人の外に道なく、道の外に人なし。同上

徳の言たる道を行ひて心に得るあるなり。朱子

道存すれば則ち國存し、道亡ぶれば、則ち國亡ぶ。韓詩外傳

博愛共存

社會共存の道は人々權利を護り、幸福を求むると同時に、他人の權利を尊重して、苟も犯すなく以て自他の獨立自尊を傷つけざるにあり。福澤諭吉

博く愛する之を仁と謂ふ。韓愈

己を推して人に及ぼす者も亦中心油然として人と其利を共にし、其の善を共にすることを樂しむ。其れ能く此の若くなるときは則ち我が惻隱の情、類を以て之を擴めて其の本量に充つべし。中村惕齋

小人は己あるを知りて人ある事を知らず、己に利あれば人を傷ふ事を顧みず、近きは身を亡ぼし遠きは家を亡ぼす。熊澤蕃山

人咎むとも咎めず。人怒るとも怒らず。同上

愚人は多く利他を先とせば自から利省かれぬべしと、然かにはあらず。道元禪師

四海の内一意同欲、生きて厚利あり、死して遺教あり。晏子

人の寶を視ること其の寶の若けん誰か竊まん。人の身を視ること其の身の若けん誰か賊はん。同上

吾々の隣人の繁榮は結局吾々の繁榮である。ラスキン

孤掌は鳴らし難し。禪語

孤立の人は人たる資格なし。西諺

唯己れの爲に生活する人は生活すべき價値なし。英諺

世の中は芻蕘に乗る人擔ぐ人、尻の痛きに肩の痛きよ。讀人不知

世の中にあるは思へば人の從者かな上に備はれ下に使はれ。同上

我が爲を爲すは我が身の爲ならず人の爲こそ我が爲となれ。同上

人をのみ渡し渡して己が身は岸に上らぬ渡守かな。同上

國大なりと雖も戦ひを好めば必ず亡ぶ。天下安しと雖も戦ひを忘るれば必ず危し。司馬法

百戰百勝は善の善なる者に非ず。戦はずして人の兵を屈するは善の善なるものなり。孫子

善く戦ふ者は先づ勝つ可らざるを爲して以て敵の勝つべきを待つ。同上

戈を止むを武となす。左傳

兵を用ひ亂を止め暴を討つ。必ず義を以てす。張氏叢書

上兵は謀を伐ち、其の次は交を伐ち、其の次は兵を伐ち、其の次は城を攻む。孫子

兵は不祥の器にして君子の器に非ず。已むを得ずして之を用ふ。老子

戦争・兵亂

○怒は逆徳なり。兵は凶器なり。争は末節なり。  
 ○善く士なる者は武ならず。善く戦ふ者は怒らず。善く勝つ者は争はず。  
 ○夫れ師はこれ相ともに不利を爲すものなり。  
 ○一年の兵亂は三年の飢饉に劣る。  
 ○野に毒草なし。  
 ○流血川を成す。  
 ○敢に勇なれば則ち殺され、敢せざるに勇なれば則ち活く。  
 ○死を必ずすれば則ち生き、生を幸すれば則ち死す。  
 ○戦ひて勝つは易く勝を守るは難し。  
 ○卒將を畏るゝこと敵よりも甚しき者は勝ち、卒敵を畏るゝこと將よりも甚しき者は敗る。人を殺して人を安んず。これを殺すも可なり。その國を攻めてその民を愛す。これを攻むるも可なり。戦を以て、戦を止む。戦ふと雖も可なり。  
 ○戦ひを以て戦ひを去れば戦ふも可なり。殺を以て殺を去れば殺すも可なり。刑を以て刑を去れば刑を重くすも可なり。  
 ○義軍あり、勃然として起る。乃ち強暴を討ち、亂世を平らげ險を夷らげ穢を除き、濁を以て清と爲し、危を以て寧と爲す。  
 ○士を養ふ千日。用は一朝にあり。  
 ○善人民を教ふること七年ならば亦以て戎に即くべし。  
 ○禮樂慈愛は戦の著ふる所なり。夫れ民事を讓り和を樂しみ親を愛し喪を哀しみ而る後用ふべきなり。  
 ○武實に文の功を昭かにす。

史記 老子 墨子 邦 左 戰國策 老 子 吳 子 同 上 司馬法 商 子 淮南子 通俗篇 論語 左 傳 國語

○上下心を一にし、三軍力を同じうすれば攻むべからず。新 序  
 ○文ありて武なければ以て下を威すなく。武ありて文なければ、民畏れ  
 て親しまず。  
 ○治に居つて亂を忘れず。 孔子(家語)  
 ○兵は猶ほ火の如し。戦めざれば將に自ら焚けんとなす。 左 傳  
 ○兵の廢す可らざるは譬へば水火の如し。善く之を用ふれば福となり、善  
 く之を用ひざれば禍となる。  
 ○兵は國の大事。存亡の道なり。命は將にあり。  
 ○兵を用ふるに術あり。義を以て本と爲す。  
 ○不虞に備へざれば以て師すべからず。  
 ○敵は侮るべからず。時は失ふべからず。  
 ○人の慎む所は戦ひなり。戦ひは則ち衆の死生國の存亡かゝる。以て慎  
 しまさるべからず。  
 ○兵力に訴へんと欲せば須らく、まづ百種の温和策を試みべし。  
 ○予は最も正しい戦争をすして、寧ろ不正なる平和を取らん。  
 ○戦争は平和を目的とする以外に行ふべきものにあらず。  
 ○戦争は一も金二も金三も金。  
 ○戦争が起れば惡魔は地獄を擴げる。  
 ○戦争は地獄の子なり。  
 ○災厄は戦争の背中に乗つて来る。  
 ○戦争にても戦争は最後の手段にあらず。  
 ○戦争は戦争を養ふ。

新 序 說 苑 元 倉 子 六 箱 淮 南 子 心 書 戰 國 策 論 語 ケ ン ト シ セ ロ 同 上 邦 誌 獨 誌 シ エ ク ス ビ ア 西 誌 シ エ ク ス ビ ア シ ラ ー

○戦争は見物人には面白い。  
 ○戦争とは粗野なる腕力的職業なり。  
 ○戦争よ！ 戦慄すべき戦争よ！  
 ○母親等に嫉妬せらるゝ戦争。  
 ○戦争は恐忌し又は誘發すべきものにあらず。  
 ○敗戦ほど痛ましいことはないが勝戦も亦同様に悲惨である。  
 ○邦國の富強兼併は是また戦争を挑發す。如何となれば邦國強大を極む  
 るや、洪水の如くにして必ず天下四方に氾濫すべければなり。  
 ○世界に國家の複數性が存在する以上、戦争は世界歴史の終焉まで繼續  
 する。  
 ○戦争の失策には遣り直しを許されず。

獨 誌 シ ラ ー ヴ ァ ー ジ ル ホ レ ー ス 小 プ リ ニ ー ウ エ リ ン ト ン ペ ー コ ン ト ラ イ チ ケ 羅 旬 俚 諺 ト ム ス ン ス モ ー ル リ ッ ツ デ フ ラ ン ク リ ン チ ャ ン ニ ン グ シ ル レ ル

○兵力に訴へんと欲せば須らく先づ百種の温和策を試むべし。  
 ○確實なる平和は期待すべき勝利に優れり。  
 ○平和にも勝利あり。それは戦争に劣らず賞讃さる。  
 ○平和なる者に平和なきことなし。  
 ○平和の爲にあらざれば戦はず。  
 ○平和は戦争によつて招致さる。  
 ○平和を望まば戦争の準備せよ。(武装の平和)  
 ○木刀を手にする平和は戦なり。  
 ○神は和を好みて姦を惡む。  
 ○それ神は亂の神にあらずして平和の神なり。  
 ○仁者に敵なし。  
 ○天下和平なれば、婦人子あるを樂しむ。  
 ○我は主なる神の語り給ふ所を聽かん。神は其の民に平和を語り給へば  
 なり。  
 ○凡そ兵は過なきの城を攻めず、罪なきの人を殺さず。夫れ人の父兄を  
 殺し其の財貨を利し人の子女を臣妾にするは此れ皆盜なり。故に兵を以  
 て暴亂を誅し、不義を禁ずる所以なり。兵の加ふる所は、農その田業を  
 離れず、賈その肆宅を離れず、士大夫その官府を離れず。其の武議、一  
 人に在るに由れり。故に兵は刀に血ぬらずして天下親しむ。  
 ○忍能く自他平和の事を生ず。謂く、自身眞志の過失の爲に染られざる  
 は即ち是れ自の平和なり。既に憤り恨まざれば他の苦を生ぜず。即ち是  
 れ他の平和なり。 尉 繚 子 無 著 (攝 大 乘 論)

ケ ン ト ハ ン ニ バ ル ミ ル ト ン シ ル レ ル マ ッ キ ン レ ー コ ル ネ リ ウ ス ・ ネ ボ ス 出 所 不 詳 葡 萄 牙 俚 諺 莊 子 聖 書 孟 子 毛 萇 (毛 詩 註) 聖 書

○備者自ら名教あり。何ぞ兵を事とせん。 范文正公(近思錄)  
 ○陣太鼓も鳴をひそめ、軍旗もまかるゝ時人間の社會に世界の締盟あり。 テニス  
 ○平和と正義と神の言葉とは人民に與へらるべきものにして賣らるべきものに非ず。 ラスキ  
 ○平和こそ常に戦争の終局目的なれ。 キーランド

國際信義・國際親善

○奸策と不信との間には戦争止まず、たゞ誠實と信用との間にのみ平和あり。 シルレル  
 ○信以て之を成す。君子なるかな。 孔子(論語)  
 ○仁に親しみ隣に善くするは國の寶なり。 左 傳  
 ○國人と交りては信に止まる。 大 學  
 ○人は交るに信を以てすべし。己れ人を信じて人も亦己れを信ず。人は相信じて始めて自他の獨立自尊を實にすることを得べし。 福澤諭吉  
 ○信頼は信頼を喚起す。 西 諺  
 ○信は國の寶なり。民の庇ふ所なり。 左 傳  
 ○徳日に新なれば萬邦これ懐く。 書 經  
 ○若し天下をして兼ねて相愛せしめば國と國とは相攻めず家と家とは相亂さず。 墨 子  
 ○友情は人生のセメントなり。 佛 諺  
 ○友情は魂の結婚なり。 ヴォルテール  
 ○自由と平等とは吾人の権利にして友愛は吾人の義務なり。 同上

國際協力

○文明は甚だ複雑なる組織の結果なり。 エマース  
 ○合すれば立ち離れば倒る。 英 諺  
 ○協力の仕事に於て吾人が第一に心すべき事は多を、一となすべく衆の中に自己の心を没することである。 グラッドストーン  
 ○共同の利益となるものの抛棄は自然に對する罪惡なり。 シセロ  
 ○我意よりも共同の利益の爲に盡くす者は善行者なり。 トマス・ア・ケムピス  
 ○此の世に於て互に相助くることは必要なり。 ラ・フォンテーヌ  
 ○共同は力を生ず。 獨 諺  
 ○群衆は仲間にあらず。 ベーコン  
 ○共同の敵に對しては相互の小争を捨てよ。 英 諺  
 ○狼が狼を知る如く、盜賊は盜賊を知る。 同上  
 ○同一事を知る人々は永き間互ひに最良の仲間ならず。 エマース  
 ○本當の國際聯盟を成就せんとする努力は實に、一如の更に十分なる實現と歩趨を一にするものであることである。 同上

五 備 考

一 徳富蘇峰著國民小訓序

萬世一系の皇室に彌榮あれ。之を中心として團結したる日本國民に福昌あれ。開闢以來の獨立帝國たる日本國に幸運あれ。是れが著者の祈禱である。  
 然も著者の胸底には一種の不安が蟻まりてゐるを告白せねばならぬ

ことを頗る遺憾とする。著者は黒雲が我が帝國の上に渦巻いてゐるを見る。此れは著者一個の幻影である乎。迷像である乎。

その黒雲の一は外患である。著者は今此外患に就て、詳しく語ることを憚る。されど如何なる樂天家たりとも、我が日本帝國の國際的位置は安全であると斷言し得る者はあるまい。吾人は決して恐怖症患者ではない。されど我が帝國四圍の情態は決して常脈であり、平調であると云ふを許さない。若し天氣豫報者の語を假りて云はんか、明日天候異變ありと云ふの外はあるまい。低氣壓乎。高氣壓乎。其詳なるは得て語るべきでない。されど誰しも好天氣の三字を打出し得る者はあるまい。

吾人は輕卒に國難來を大聲疾呼せんとする者ではない。されど日蓮をして、今日に在らしめば彼は必ず立正安國論を著すであらう。林子平をして今日に在らしめば、彼は必ず海國兵談より以上の書を作らむ。我が帝國の對外關係は決して平常でない。否全く異常である。現時の安靜は暴風雨前の安靜にして決して安靜其物ではない。

それよりも憂慮に勝へぬは内憂である。内憂の主なる一は階級的反目である。假令外に向つて叩頭政策若くは隱忍政策を以て其禍機を將來に推し延ばすことを得んも、内憂に至りては既に我が眉端に迫り、而して刻々に迫りつゝあるではない乎。此の階級的争闘は果して日本國民の團結力にひびが入る氣遣ひなき乎。然も更により大なる内憂は國民間に於ける思想の混亂である。此の混亂は千古萬古光を放ちつゝある。我が國民的精神を消滅する心配なき乎。  
 人各々思ふ所あり。若し各個に就て質さば一家の内たりとも、思想の統一を期す可からず。況んや一國の大に於いてをや。されば吾人は

決して世の所謂思想統一なるものに與する程の没分曉漢ではない。されど國民として、其の自國に對して根本思想を一にすべき必要は固より云ふ迄もなし。其の根本思想の一致に於て茲に始めて國民的一致を見出すではない乎。

然るに即今我が思想界の情態を見れば混亂の二字は未だ全く之を盡せりと云ふ可からざる程である。否な寧ろ渾沌と云ふ可き程である。之を概説すれば、宛も高竿を立てたる如く右傾せざれば左傾し、左傾せざれば右傾す。而して其の直幹亭々として聳立するものは殆ど稀である。

其の左傾者中には或は米化者あり。或は露化者あり。或は平和熱好の種、降伏派となり。或は平等熱好の種、共產主義者となり或は自由熱好の種、無政府主義者となり。或は博愛とか人類同胞とかの所謂福音にかぶれて自國を忘れ自由同胞を閉却する者あり。而して其の何れも自國の歴史を無視し若くは遺却するの點に於ては皆な其の控を一にしてゐる。若し夫れ右傾派に至りては必ずしも自國の歴史に關心せざるにあらず。されど彼等は豆の如き眼孔を以て之を讀み毫も建國以來巍々蕩々六合を家とし四海を一とする大規模、大精神を會得せず、只だ極めて偏狭なる國民的精神に囚はれて、之を世界に擴充する所以を忘れ、徒らに榮螺の籠城、蟻蟲の袋居、蟹の穴棲を以て其の能事とするに至る。若し孟子をして今日我國の思想界を觀察せしめば、彼は必ず楊に之かざれば墨に之くの嘆聲を發するであらう。

概して言へば或者は國民的精神に遡上して國際的精神を顧みず、或者は國際的精神に遡上して國民的精神を顧みず。而して國民的精神を擴充すれば國際的精神となり、國際的精神を煎じ詰むれば國民的精神

となり、自國に貢献するは世界に貢献する所以にして、世界に貢献するは自國に貢献する所以なるを解せず。此の如くにして兩者交も相軋す。

此の如く一方には經濟的因由よりして階級的の反目を來たし、他方には思想的因由よりして、精神的の反目を來たす。此の如くして擧國一致以て將に來らんとする國難に當らんとするも、亦至難の事と云はねばならぬ。

著者は敢て明りに、自ら中正の立場を占むる者とは任じない。されど著者は思想の系統に於て歴史派に屬する者。彼の歴史を無視して、空理空想に駕し、自ら止まる所を知らざる者と固より其の趣を異にしてゐる。而して又彼の歴史的發展の全體を大觀せず、只だ其の一局部に没頭して、宛も山中に彷徨して山を見ざる者と道連れたること能はず。著者は唯だ日本帝國の發展の歴史を辿りて、其の源頭に及び、更に其の源頭よりして、明治天皇の大御世に至り、我が帝國と國民との運命に就て切かに自ら信ずる所あり。敢て其の所信の一斑を披瀝して我が同胞に警告せんが爲めに此の小著を作した。

著者幼にして家學を受け遲暮耳順を過ぐ。功名の念轉た疎。固より世の政客と與に當代に角逐するの意を絶つ。但だ文章報國の志、歳と與に愈よ切を加へ、自ら裁する所以を知らず。大正十四年一月元且より稿を起して、一氣呵成にして三十篇を作した。其言の平凡にして其説の庸常なる、他の新人の驚時駭世、奇々怪々の創論異説と頗る同じからず。或は陳套爛熟の文として唾棄する者もあり、されど著者の目的は異にあらずして平にあり。奇にあらずして正にあり。著者は敢て天下の崇論高議者を對象とせず。只だ忠良なる我が日本帝國の臣民た

る諸君に向ひ、其の國民としての安心立命を得るの、一助として立言す。それ豈此の小著を以て帝國の内憂外患を一掃し去るものと言はん哉。昨秋吾兒萬熊の方に死せんとするや。予告げて曰く。安心して逝け。汝の働け可き丈の事は、乃父必ず之に任せんと。而して兒首肯するもの如くして隠じぬ。爾來著者は快々として樂しみます。他に向つて強ひて言笑するも、心中には三斗の熱鐵を呑み去りたる如く、獨り自ら悶絶す。吾兒は何事をも成さずして逝きたるも、其志の存する所は著者能く之を知る。本書は此の意味に於て著者が亡兒に代りて作したるものと云ふも不可なし。

蘇峰學人

大正元年八月即ち明治天皇崩御の刻下、著者は皇室中心主義なる新熟語の下に、我が國民の嚮往すべき大道標の建立を心掛た。大正二年「時政一家言」を著した。大正五年には「大正の青年と帝國の前途」を著した。而して本書は前二著と其系統を同するもの、苦し頼ひに併讀せられんには、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。著者は必ずしも同一思想を蒸し返し繰り返すにあらず。唯だ國家の大本、大體に於ては決して動かす可からざるものあるを信じ、切に之を闡明するの必要を感じたるのみ。

### 二 文化國家と國際精神

社會が發達して人類の自覺が高まるにつれて、文明の進歩は即ち道德の進歩であることが各個人に會得されるやうになります。社會生活の諸制度即ち經濟も政治も宗教も學術も皆道德の向上に伴うてそれぞ

れその理想を高めます。現代社會の理想とされてゐる社會的正義も、連帶責任も、相互扶助も、自由平等も、博愛協力も皆道德的訓練を経て始めて權威を具へるやうになり、道德的背景があつて始めて價値を有するやうになります。しかも文明の進歩に個人と社會とが相關的責任を分有する以上、個人と社會とは常に一致協力して道德の維持と向上とに努力しなくてはなりません。このやうな自覺の上に立つのが文化國家であり、國際的精神であります。

文化といふ言葉は現今種々の方面で廣く使はれてゐますが、その意味は頗る曖昧であります。しかし、この言葉は凡そ三つの概念に區別して考へることが出来ます。第一には私達の物質的生活に出来るだけ自然科學の研究による成果を取り入れて生活を便利、安穩にすることをいひます。文化生活などいふのは即ちこの意味であります。しかるにこれに對して文化生活は却つて奢侈贅澤を助長させる生活であるから物質的生活の内容を豊富にするといふ條件だけでは、文化の概念を示すことが出来ないといふ非難が起ります。隨つて物質偏重説に對して第二の意味の文化が唱道されます。即ち文化とは心身の自由活動を阻害するあらゆる束縛から脱却して、精神と物質との兩方面の生活内容を豊富にし個人の自由公正な要求を満足させる創造的努力を指すといふ説であります。この説は第一説よりも數段進んだ意義を有するといふまでもありません。文化生活は單に物質的内容だけの充實でなく、生活に當然伴ふ不法な習慣、因襲を打破して、理性の要求に適應する合理的生活をしようとする創造的生活であるといふのは、よほど深い意味のあることあります。しかし創造的努力が文化であるといふと、文化の概念はあまりに個人的・差別的になります。そこで

この缺點を除いて文化に普遍的妥當な規範性を入れようとするのが第三の意味の文化であります。即ち文化とは文化生活の合理的創造の外に規範的拘束を承認して社會・國家の要求と個人の要求とを一致させて合理的社會生活を遂げようとする努力であるといふ説であります。この説によりて始めて文化生活が國家社會に深い根柢を有し、個人的又は一時的のものではなく、物質・精神の兩方面に互つて、人類が集團的又は永久的に創造する努力の生活であることが會得されます。謂ゆる文化財はこの努力によつて生じたるものであります。文化財は往々單に文化といはれることもあります。

文化の意味が果して上に述べたやうであるとしますと、個人の最高理想は文化であつて、物質精神の兩方面に互つて自由な創造をする事が個人の至高至聖な任務であるといふことが出来ます。そして國家は人類の社會生活の規範となるべき公正の保持者として個人の人格の自由平等な創造的活動を保護助勢することを使命とすべきであるといふことが出来ます。私達はこのやうな國家を文化國家と呼びます。即ち文化國家は國家構成の分子である各個人の神聖、尊貴な人格を平等に待遇し、その自律的な自由の活動を保障し公正な見地から、その生存と發達とを統制して、人類の永遠の發展に貢献させることを使命とするものであります。このやうに考へますと、從來の警察國家、武斷國家が眞の國家でないことも、また國家の理想が軍國主義や資本主義の上にだけ立つべきものでないことも自然に會得されます。

國家の使命が上に述べたやうであるとしますと、國家はまた當然國際的精神によつて相對的に他の國家と融合することを任務とすべきであります。なぜかといひますと、一國の成員である個人は、同時にま

た人類同胞即ち國際的社會の分子でありますから、他の國家の成員である個人と相提携するのが當然であるからであります。即ち國家は個人にその國家の爲に貢獻させるとともに、廣く人類一般の爲に文明進歩の聖業に努力させることを任務とすべきであります。このやうに始めて文化の普遍妥當性が承認されます。昔から唱道された、普汎主義・世界主義・人道主義などには皆このやうな見地に立つ主張であり、また近時勃興した國際運動も個人に四海同胞の生活を享受させ、相互に自由平等な人格を尊重し、連帶責任の自覺によつて互に協力し、公正な待遇を以て最高理想の實現に參與せよとするのであります。私達は自分の國家をして文化國家の使命を十分遂行させると同時に、よく國際精神を會得して相對的に自立してゐる各國家の發達を助けるやうにしなければなりません。

このやうに考へますと、私達個人の社會に於ける地位は自然に明瞭になります。個人は實に國家即ち國民と社會と世界即ち國際的社會との間を結合する楔子であります。鳥が巢ふべき樹木を要し、魚が息ふべき淵瀬を要するやうに個人はその身を宿すべき立場として國家を必要とします。そして、各國家がそれぞれ獨自特異な發達のために努力してこゝ始めて世界の文明が色彩の豊富な偉觀を呈することが出来るのであります。それですから、私達は日本國民として我が傳來文明の繼承の爲に國民的理想に順應同化して特色ある我が國家の進歩・發展を圖ると同時に更に人類社會の一般理想を追うて人類永遠の發展に貢獻するやうに努力しなくてはなりません。

藤井健治郎著(新時代修身書上級用)

### 三 民族自決主義

國民主義と相關連する政治上の主張であつて、國家の範圍と言語、傳統、歴史、習慣、道德及び血統等を共通にする民族の分布範圍とが合致することを窮極の目的とする。この民族の特徵としては從來は主として斯る客觀的な様態や文化が擧げられたが、近時に於ては斯る外部的標準よりも、寧ろ各人が互に一民族なりと意識する其の意識力によるのであるが、何れにしても一民族が他民族の政治的抑壓より離れて、其民族特有の文化使命の完成に進むべしとの根本的主張には何等の變化もないこの主張の根柢を爲すものはカントの倫理學說である。即ちマキアヴェリの國家說に由來する權力國家說に在りては、權力ある國家は權力なき民族を併呑して自國の發展を計るは正當であるが、カントの倫理學說、即ち人格はそれ自身に於て目的であり、斷じて之を他の個己の利己的手段と見做すべきでないとの主張が國家學說の上に現はるれば、各民族は夫れ自身が目的であり、決して他民族の政治的又は經濟的目的の手段となるべきではないとの主張となる。この主張は世界大戦中主として米國大統領ウィルソンによりて高調され、聯合國側は之を巧に政略的宣傳の具として用ひる事により、獨逸軍の内部的崩壊を劃策したのである。即ち獨逸國の如きは十幾種の民族より成立してゐるので、此等の民族に對し大戦後は各々民族自決による獨立國家の形成を約束すると云ふ宣傳は、獨逸側の敗因の重要な一を示したのである。英佛米諸國は専ら民族自決主義をば獨逸の權力制約の爲の具として利用するに至り、僅々十六萬人のチェッコ人と三百五十萬人の獨逸人を有するチエッコ・スロバキア國を初め、其民族の要求と

### 五 國際聯盟

ウィルソンの提唱によりヴェルサイユ條約中に定められた國際聯盟規約に基き、國際平和の確保と國際協力の促進を圖るとの名の下に、世界の諸國が相協力して、(一)國際間に於ける強力の支配を否定し、(二)國際關係の公明を主張し、(三)國際法の權威を高唱し、(四)國際原則の確立を提唱して以てその現に得つゝある利益の維持を主たる目的とする國際間の一組織である。國際聯盟を組織する聯盟國に原聯盟國と加盟國との別があり、原聯盟國とは平和條約の署名國たる二十二ヶ國と加盟を招請された國十三ヶ國で(その中アメリカ合衆國と外二ヶ國、計三ヶ國、後脱退)、加盟國とは右の外、一定の規定に基いて加盟した國で、現在十二ヶ國である。國際聯盟はその活動をなすために主たる機關として聯盟總會、聯盟理事會、常設聯盟事務局の三つを有つ。聯盟總會は各聯盟國の代表者を以つて組織される議決機關で通常毎年一回九月に開催され、聯盟理事會は總會と同じ機能を有し、イギリス、フランス、イタリア、日本及びドイツの五常任理事會の代表者と、總會によつて互選される、九ヶ國の非常任理事會の代表者(任期三年)とからなり、毎年三月、六月、九月、十二月に定期に開催されまた常設聯盟事務局は聯盟の執行機關で、各方面の専門家を網羅し、本部の所在地スイスのジュネーヴにあり、ロンドン、パリ、ローマ、東京に各支局がある。尚ほこの外に、聯盟は補助機關とし、財政經濟機關、交通々過機關、保健機關、軍備問題機關及び常設委任統治委員會、阿片取締諮問委員會、常設婦人兒童賣買取締委員會、その他と特別委員會を設け、また別に特別機關として國際司法裁判所と國際労働

(社會科學辭典)

りも寧ろ英佛側の政策的利益よりする所謂民族國家の成立を見たのである。之を要するに民族自決主義の標語も結局は英米佛の權力國家主義の好餌となつたに過ぎず、これは理想としては妥當するも、現實の國際關係を支配する實際的な力はないのである。(社會科學辭典)

### 四 國際主義

國家又は國民の利益以外の、若しくは以上の、利益が、諸國民の間に共通に存在することを認めて、これを擁護せんが爲めに、諸國民又はその或一部乃至は或階級に向つて相互協働すべきことを主張する主義である。この主義の一つの現はれは、國家相互間の紛擾争闘の小止みなき状態を脱して、各國家の共同により平和的國際社會を現出せしめんとする企てである。その二は、國際的協働によつて眞理の發見、文化の向上を促進しようとする國際的學術協會、文化協會その他之れに類する國際的組織結社である。その三は、近時の國際主義的運動のうち最も目覺ましいものであるところの、労働者の國際的團結である。「労働者には祖國なし。人は彼等より、その有たざるものを奪ふこと能はず。……萬國の無産者よ、團結せよ」といつた、マルクスの宣言に準據し、諸國の労働者階級が資本家に對する共同戦線を張るために合同、團結を進めてゐるのがこれである。これらは單に國際主義的運動の二三の現象に過ぎないが、これを以て見ても、國際主義は、それが一、二の範圍にとゞまる限り、國家主義乃至國民主義と背馳する所はないが、三の程度に至ると、マルクスの宣言が既に示してゐるやうに、國家主義乃至國民主義の本來の主張と全く相容れない。



機關を設けてゐる。國際司法裁判所は國際的性質の紛議を裁判し、またこれに勸告的意見を與へるものであり、國際労働機關は國際的協力によつて諸國に於ける労働條件の改善をはかることを目的とし、總會、理事會及び事務局から成立してゐる。國際聯盟はかくして一九二〇年一月以來その活動をつづけてゐるが、社會主義者の中にはこれを資本家インテリゲンチヤと呼び、今や崩壊の過程を辿りつゝある世界の資本主義がその破れ目を接ぎ合せて、世界平和の名の下に世界のプロレタリアに向つて最後の闘争を企圖してゐるものと見てゐる見もある。

(社會科學辭典)

### 六 平和思想

おおよそ人は誰でも平和を好んで、戦争を惡まぬものはなからう。それならばこそ、昔から東西の聖人・賢者といはれるほどの人は、人を戦争の苦みから救つて、平和を樂しませようとなつてゐるものなかつたのである。孔孟の教はつまり仁義の道をひろめて、國を治め天下を平かにしようといふのに外ならぬ。また釋迦やキリストはいふまでもなく、宗教界の偉人といふ偉人は、すべて熱心な平和の宣傳者だつた。それにもかゝらず、戦争は今日になつてもまだ全くその跡を絶たぬのは何故だらう。ある世界大戦の慘禍に懲りて締結された國際聯盟でも、國際上の争議はこれを戦争に訴へずに、國際仲裁裁判によつて調停することを各國に盟はせたままで、その後、アメリカ合衆國大統領の提議によつて、五大強國間に軍備の制限に關して商議されたが、その結果もまた、たゞ海軍の主力艦に關して或程度の制限を、しかも年限を附して協定しただけで、後また補助艦艇の制限をしようとする提

議がアメリカ合衆國から出て、日・英・米の三國間で協議したけれども不調に終つた。そして今やまたいはゆる不戰條約について各國の間に商議されてゐるけれどもその結果はまだ不明で、各國ともに全く軍備を撤去して、互に心から相信し相親しむことは、今日のところではまだとてもできさうにも思はれない。のみならずヨーロッパの國際關係は、依然いはゆる國民主義の時々の際頭によつて脅やかされ、いつまた戦争の渦中に捲きこまれるかも知れない形勢さへも見える。従つて國民の心に平和思想を養成することは、ひとり我が國に於てばかりではなく、世界の各國に於てもひとしく大いにこれをつとめねばならぬところである。さうでないといふと、せつかくにできあがつたあの國際聯盟も今に全く空文に歸してしまふかも知れない。

國と國の間に戦争が起るのは、ちやうど人と人の間に争闘の起るのと、同じ心理に基づくものである。一方に強慾でそして腕力をたのんで人を壓伏しようとするものがあると、地方にもまたこれに反抗して立つものがある。人と人の争闘は通常かうして起るものである。これに反して、もし雙方がこんなことは極めて野蠻な舉動であつて、つまりは雙方のためにたゞ不利益をもたらすのに過ぎぬことを知ると、争闘は自然に起らなすむ。そして萬一利益・意見の衝突から兩立することができぬ場合が生じて、こんな人なら、必ずおもむるに道理に訴へて是非を解決するだらう。國民の多數がこんな心持になつてゐるところでは、その國內が比較的平和に治まるばかりではなく、外國に對しても戦争の原因となるやうな舉動をつゝしむものである。そして、國民の平和を愛する念が強いと、その國家も自然に平和を愛するものである。だから、世界の平和を望むなら、まづ各國の國民が皆よ

い戦争の大きさを認め、その上、平和を愛する強い念をもつてゐることが必要である。

「殘酷な人情、殺伐な風俗、權勢に對する欲望、激昂し易い氣質などが、人と人の間に争闘を起すやうに、また國と國の間にも戦争などを起す原因となるものである。そして、これらの性向はおもに男子に見られて、女子には比較的少いから、平和思想の養成とその普及につとめることは、女子に最もよく適する。男子は多く戸外にあつて絶えず生存競争に従事するので、その性質はとかく荒々しくなるのに反して、女子は平生専ら内にあつて家庭を守つてゐるから、靜かにその温良な天性を保持し、またこれを涵養することができるといふ。かうしてできた女性の美德を、ゲーテは「神聖な静けさ」と名づけた。そして、この「静けさ」は多くの忠告にも脅威にもまして、男子の心の荒々しいところをしづめて、その争闘をやめさせる微妙な力をもつてゐる。この外、女子はまたその特有の純眞な愛を注いで、國の内外を問はず、人の心を互に融和させる力をもつてゐる。西洋では、昔から、平和の精神を女神の像によつてあらはしてゐるのは、女子にこんな天性が自然に具はつてゐるからである。一旦國難に際しては、女子ももとより男子と力を競せてこれを救はねばならぬが、それよりも、こんな不祥事の起らぬやうに、前もつてその天性によつて國の内外に平和の氣分をみなぎらせることが、女子の最も力を盡してつとめるべきところである。

湯原元一著(女子修身訓卷五)

### 七 人類愛

愛は、自己愛から民族愛・國家愛、それから遂には人類愛にまで擴

充されねばならぬ。こゝまで擴充されねば、愛も眞の愛とはいはれぬ。國家愛には人の最も尊い殉國の精神がとりわけ著しく現れるけれども、たゞそれだけに止まると、愛はまだ徹底したとはいはれぬ。その上、みだりに國家愛を高調すると、國民と國民が互に憎惡して、世界の平和を妨げる恐がある。往年の世界大戦の直接の原因は利害の衝突だつたけれども、もし國民と國民の間に人類愛が十分に養はれてゐたら、あのやうな慘禍は必ず豫防することができただらう。だから、愛は遂に全く利己心から解放された人類愛にまで擴充されねばならぬ。

我が國民は建國以來まだ一度も外敵に國土を蹂躪されたことがなく、同胞を虐殺されたなどの經驗が極めて少いから、他の國民に對する憎惡の念は殆どこれを知らぬといつてもよい。徳川幕府の末に一時は攘夷論も起つたが、開國後はむしろ外人崇拜の弊に陥つたほどで、他の國民に對して理由もないのに排斥の舉動などに出たことはない。その上、これまででも交戦中の敵國の人に對してさへ親切に保護を加へて、平生の友誼を忘れることがなかつた。この點に於ては、私達はあの民族憎惡の念の強い西洋人に對して大いに誇ることができるといふ。一定の國境内に割據して、各特別な言語・風俗・信仰などをもつてゐても、横目・縦鼻の人であることには別に變りのないものが互に對峙して、心の中では絶えず猜疑して警戒を怠らぬといふのは、人格の完成を理想とする文明國民の恥ではあるまいか。ところが、今になつてもまだこの暗影が各國民の心から全く拭き去られぬのは、つまり人類愛がまだ十分覺醒されぬからである。ちやうど時としては自己愛のために民族愛や國家愛が抑へられるやうに、民族愛や國家愛のために人類愛の覺醒と活動を妨げられてゐるのが、今日の國際關係に於いて

どこにでも見られる國民對國民の普通心理である。いふまでもなく、私達は我が民族をもまた我が國家をも愛さねばならぬが、しかし、そのために人類を愛してはならぬといふことになる、愛はやはり利己的な節制に止まつて、その最大最後の使命を全うすることはできぬ。

人類愛を盛にするのには、まづよく他の國民を理解することが必要である。私達が俗にいふ「毛嫌ひ」をするのは、多くはよくその人を知らぬところから起るやうに、民族憎悪も相互の誤解に基づくことが少なくない。疑心が暗鬼を生じて今まではいぢづに敵と思ひこんでゐたものが、よく交際して見ると、案外にも味方だつたことを知る場合も往々にしてある。大正十二年の關東大震災の際に、世界各國が我が國に寄せた無限の同情については、誰でも定めしこの感を深うしただらう。あの攘夷論が間もなく止んだのも、その後外國の事情が我が國民によく知れたからである。どの國の人でも、愛を以て接すると必ず愛を以て應ぜぬものはない。愛は地下水のやうにどこにもあるから、深く掘りさへすると、必ず湧き出す。少しく自分に異なるものを悪魔のやうに思ふのは、世間を知らぬ固陋の偏見である。この偏見こそ實に今日人類愛の普及を妨げるおもな原因である。

しかし、人類愛は廣く人類に對する愛だから、この愛が起るのには、その人の眼界があまりなく人類を包み、そして、これとともに共存共榮の樂みを分けようといふ高尚な志がなければならぬ。場合によつては、たとひ自分を呪ふものに對しても、必ずこれを救つてやらうといふ、寛仁でしかも勇猛な精神までもなければならぬ。他から自分を愛してもらふために他を愛するといふやうな利害にとらはれた心を

は、まだ人類愛とはいはれぬ。他が自分を愛しようといふと、自分はいつも必ず他を愛することができねばならぬ。その上、他から誤解されても、或は敵視されても、決して他を救はうとする志を棄てぬやうにせねばならぬ。しかもこの心掛は私達より文化の程度の遙かに低い弱小國民に對してとりわけ必要である。文明國民ばかりを愛して、未開國民や野蠻民族を愛せぬのは、これまた眞の人類愛とはいはれぬ。

自己愛乃至人類愛は道徳として高下・廣狭の區別があつても、それが愛であることには變りがない。そして、愛に富むのは私達女子の特徴である。私達は愛の力によつて家庭を作つて、家族に平和の樂しみを與へてゐる。従つて愛を人類愛にまで進めて、世界を家庭とし人類を家族として、こゝに永遠の平和をもたらすことは私達女子の任務として大いにつとめるべきである。 湯原元一著(女子修身訓卷五)

### 八 世界平和への道

一 世界に人類あつてこの方、その殆んどすべての者が経験し、また現に経験しつゝある主なる生活は、家庭生活であります。けれど、家庭生活は親子の愛、兄弟・姉妹の愛によつて支へられ、この愛が隣人に及ぼされるところに社會・國家の共存共榮が期待せられるのであります。されば、私たち女子は家庭愛から社會愛・國家愛に及ぼし、以て社會・國家の平和と幸福との爲に貢献すべきであります。

二 古今の人類の歴史の大部分は、國家生活を爲した人民の盛衰・興亡を叙したものに外ならないのであつて、私たちは國家を離れて一日も生活することが出来ないであります。實に國家は國民としての

私たちの缺くまじき生活様式であります。しかし、更に觀點を廣めて世界を見るに、今日ではもはや列國の侵略・併合は許されず、互に相扶けてその獨立と存続とを圖り、以て世界の平和を保たなければならぬのであります。義に、國際聯盟規約が制定せられ、近來、頻りに軍備縮小會議が催せられるのも、亦これが爲であります。この故に、家庭愛を社會愛・國家愛に延長すべき所以を理解した私たちは、更に數歩を進めて人類愛を發揮して、世界恒久の平和の實現に努力すべきであります。

三 このやうに、内は國民各個の相愛によつて自國の隆昌を圖り、外は各國民が胸襟を開いて人類愛を發揮し、世界を擧げて四海兄弟の理想を實現せしむべきであります。然るに、今なほ進化の途上にある各國民はそれ、自國の存立と國民の統一とを確保するため、これに屬する個人の生活や行動を制限してゐます。これが國家主義の態度であります。

四 如上の國家主義が動機となつて、或は政治的に、或は經濟的に、また或は軍事的に、國力の伸張と商權の獲得と領土の擴張とを目的として弱小國に臨むのが帝國主義であります。これ十九世紀の歐米列強の多くが採用實行したところでありませぬ。

五 しかし、帝國主義は、動もすれば武力本位となり、侵略本位となるので、これが實行は人道に背くことあります。この弊害を去り、強國の横暴を抑へようとして唱へられたのが國際主義であります。これは國家内に存する法の精神を國際間に擴張し、國際正義と人類愛との二觀念を以て、國家や國民の行動を律し、世界の平和を招来しようとするものであります。かの萬國聯合郵便及び電信・萬國博覽會・各種

の國際會議・學術上の共同研究・交換教授・赤十字聯盟・國際聯盟の如きは、いづれも世界人類の共存・共榮の理想を實現する國際主義の實行であります。現に今日、國際聯盟人の口から世界協同政治といふやうな言葉が發せられてゐます。海軍軍備縮小會議は、米國の主催によつてすでに二回開催されてゐるが、その際、各國代表者の夫人たちが互に相往來して平和な氣分を作り、會議の進行に好影響を與へたといはれてゐます。女子が人類愛の精神を發揮して、世界の平和に貢献すべき機會は今後一層多くなるであります。

六 凡そ國家生活には、國民本然の性情が編込まれてある以上、如何なる國家も國家主義の上に立つべきことは、當然の理であります。まして、世界人類なる者も、國家を通して始めてその充實した意義を有し來るに於いてをやであります。たゞ、この主義は、動もすると極端に馳せて偏狭・固陋となり、排他的となり、その結果、他國の侮辱を買ひ、終に當初の所期と反對の歸結に到達することがあります。この故に、私たちは常に自國の國際的地位を念頭におき、どこまでも國際正義と人類愛とを顧慮しなければなりません。かくて國家主義は次第に國際主義に近づくのであつて、健全な國家主義は、少しも國際主義と拮抗するところがありません。この種の國家主義は、これを人道的國家主義といひ、自國本位の國家主義と明かに區別せらるべきものであります。

七 國際主義の側からいつても、亦同じ結論に到着します。世界の現實は、依然、力が重視せられてゐます。眼前の世界列強は陽には世界平和の爲に種々努力しながら、陰には軍備に汲々たる有様であります。世界列強は彼の世界大戰の害毒に、その涙腺を枯渴させた苦い經

險を嘗めてはゐるもの、人類の發展が現状にある限り、自衛上、他の不當な威歴に備へなければならず、従つて全然、武力を捨てることは出来ないであります。この故に、國際主義が眞にその目的を達する爲には、これを實行する國家が、強く且正しくなければなりません。殊に我が國の如きは、未完成國家として常に動亂絶えぬ支那と、他國の内政攪亂を目論んで止まないソヴィエツト聯邦とに隣接し、常に不安を感じつゝある以上、一方に國際主義の主張の正當なることを認めるもの、他方に、國家の獨立を維持するため、相當の軍備を必要とするものは、當然過ぎるほどの當然であります。然るに、軍備さへ制限し、或はこれを撤廢すれば、世界の平和が立どころ招來せられるやうに思ふのは、餘りに淺見であります。この故に、現實の問題としては世界における強正な國家とが互に洞察し、互に理解し、相親み、相信じて協調することによつて、國際主義は始めてその本來の目的を遂げることが出来るのであります。この故に、人道的國家主義は、ただに國際主義と衝突せぬばかりか、國際主義はむしろこの人道的國家主義に支へられて、始めてその全幅の權威を保つことが出来るのであります。

八 今や世界列強は漸く共存・共榮の理想に目覺めて、孤立主義の態度を固執せず、相携へて全人類の平和と幸福とを畫策し、爲に世界的社會の意識は、少くとも一部の文化國民の心頭に去來しつゝあります。この機會に臨みて、眞に世界恒久の平和を招來する可能性に富むものは人道的國家主義でなければなりません。而も世界列強をしてこの主義を取らしめる爲には、各國の女子は人類愛の精神が世界の平和を齎す所以を理解し、國際道徳の進歩を圖ると共に、熱心にこれが實

行を促すべきであります。

深作安文著(現代女子修身卷五)

### 第十八課 我が國民の使命

#### 要領

現代の世界に於ける我が日本國民の使命を明かにし、之を果す爲に其の覺悟を促すのが本課の要領である。

#### 注意

(一) 萬邦無比の國體を有し優秀な國民性を有つてゐる我が日本國は東洋唯一の強國として之を代表してゐる。

(二) 東洋の平和を維持し弱小諸國を安泰ならしめるのは我が國民の使命である。

(四) 東西の文化を融合して世界に無比な完全に近い新文化を創造するのは我が國民のみが果し得る使命である。

(五) 我が日本國民は日進日新の國是によつて此の重大な使命を果さねばならぬ。

#### 設問

- 一 我が國は何によつて東洋諸國を代表するか。
- 一 東洋の平和を維持する使命はどこにあるか。
- 一 東洋文化保存の任務を最もよく果すものは誰か。
- 一 東西文化を完全に融合し得るものは誰か。
- 一 躍進日本の國是は何か。

#### 四 備考

##### 一 國民主義

國民主義を語る前に先づ國民そのものゝ定義を與ふべきであらうが、今はそれに立入ることを差控へて、簡単に、一國家の下に共同生活を營む一つの社會團體とのみ言つて置かう。この國民の統一、繁榮を主張し、企圖する主義が、即ち謂ふところの國民主義である。國民主義の根據として二つが擧げられる。その一つは、國民的統一と繁榮とによつてのみ個人の生活は保證せられるといふ觀念であり、その二は、自國民は他の諸國民に比して、優越した天分を持つといふ意識である(この第二は國民主義に必ず存在するものとはいへないが、多くの場合その根據を形作つてゐるものである) 第一の根據からは、國民的統一、繁榮を他所にして個人の幸福は望まれないが故に、何よりも先づ團體的統一とその繁榮とが企圖せられねばならないといふ結論が生じ、第二の根據からは、自國民は他の諸國民に優越した天分を有するが故に、全人類の爲め自國民の統一、繁榮が企圖されなければならないといふ結論が生じて来る。この國民主義は多くの場合所謂國家主義を伴ふ。何となれば、國民は國家を以て自己の經營機關としてゐるが故に、自國民の統一、繁榮を圖るためには、國家の十二分なる活動を必要とし、且それがためには區々たる個人々々の意志を國家の意志と権力とに服従させることを便宜とし、こゝから國家を最高の存在と見る國家主義若しくは國家至上主義が胚胎して来る。この國民主義、乃至國家主義は、他國に對しては、勿論、侵略主義を採らないまでも、他國からの侵略に對して防備の意味に於て武力主義を採り、内部

に對しては、國民的統一を棄す一切の騷擾内亂に對する彈壓主義を探るを例とする。

(社會科學辭典)

##### 二 自國を知れ

己を知れとは、總ての人間の學問の第一義である。されど己とは、我が一身一個の事のみには限らぬ。我は一個人として生活するものである。家もある、國もある、世界もある。己を知るには、吾家をも知らねばならぬ。吾國をも知らねばならぬ。吾が世界をも知らねばならぬ。吾身を知る、必然の順序として、誰しも吾家に就いて知らぬものはない。若し吾家の何物であるを知らない者ならば、それは全く浮浪者だ。若し吾國の何物であるを知らない者ならば、それは全く非國民だ。若し世界の何物であるを知らない者ならば、それは全く世界の市民たる資格が無い。今日に於て、世界は交通及び通信機關の發達と共に、愈よ近く、愈よ密に、愈よ狭く、愈よ小になりつゝある。されど世界統一して、一國を傲すが如きは、今尙ほ遠き、理想の境に在りて、未だ實行の可能性は、見出されてゐない。云はゞ世界統一は、人類在りて以來の理想であるが、其の遠近なるは、殆ど今猶ほ昔の如くである。宛も金星や火星と、地球との距離が、今も昔も同一である如くに、今日に於て、人類團結の、實行的極致は國である。國は大にしては、世界に接してゐる。國は小にしては、家に接してゐる。されば人間生活の上に於て、國は實に重要な機關である。吾人は一家の安寧を保つも、國の力に頼らねばならぬ。一家已に然らば、一身は云ふ迄もない吾人が世界に貢獻するにも、國の力を透して然かせねばならぬ。勿論時としては、國家の力を借らずして、然かし得る場合が無い

でもない。されば十の八九迄は、世界の市民としての活動は、一國の國民としての活動の餘勢、若しくは餘力と云ふが、寧ろ適當である。人或は國を以て、無用の長物となし、甚しきは世界の平和を妨害する邪魔物と做す者がある。それは大いなる間違だ。若し國なくして、家と世界とのみならば、一家の安寧は、如何にして保ち得可きよ。世界の平和は、如何にして維ぎ得可きよ。國あるが爲めに、世界の平和を攪亂すると云ふか、若し國なければ、世界は全く弱肉強食の修羅場たらんも、未だ知る可からず。兎にも角にも現在の情勢迄に、漕ぎ附け、世界が小康を保つに至つたのは、列國の存立する爲めである。言ひ換ふれば、國あるが爲めに、世界の争亂が、多大なるではない。國あるが爲めに、世界の争亂が減少するのだ。今日に於て、國をぬきにして、家から直ちに世界に繋ぐことは、實際上不可能だ。強ひて之を行はんとすれば、事實は世界に無数の小國を製造する結果となる。乃ち世界を擧げて、我が應仁の亂や、支那春秋戰國期、歐洲の中古史の如き情態を現出することは、鏡をかけて見るが如くである。故に今日の人類進歩の程度に於ては、國は人類集團の極致と云はねばならぬ。此の國を愛するを、愛國心と云ひ、此の國に歸すを、報國心と云ふ。然も國を愛するにも、國に歸すにも、前の前提として、先づ吾國は何物であるかを知らねばならぬ。能く知らねばならぬ。之を知るは、之を愛し、之に報ゆるの前提である。

徳富猪一郎著(國民小訓)

### 三 世界と我が帝國

我が日本帝國ほど世界に珍しい國はない。建國以來二千五百餘年萬

ない。

元來東洋の國土は東洋人の國土でなければならぬのに、今は殆ど全く西洋人に占領されようとしてゐる。東洋の文化は西洋のそれに先立つて開け、しかもそれが人類の向上のために極めて必要なことは西洋の文化に劣らぬのに、これも次第に衰へてゆくばかりである。この東洋の國土を挽回し、東洋人をして過去の隆盛を回顧し、將來の光明を認めさせることのできるものは、我が帝國より外にはない。たとひそれまでにならぬまでも、さしあたり東洋の平和だけでも維持せねばならぬが、これも我が帝國が獨力でその責任を引受ける外はない。

我が帝國にはもう一つ重大な任務がある。およそ一國の文化はたとひどんなに優れたものでも、多少偏してゐることを免れぬ。だから、一國の文化を完全なものにするには、採長補短の工夫を怠つてはならぬ。幸に我が國民は昔からこの點に關しては非凡な消化力のあることは、前にもしばしば説いたとほりである。そこで、この上は今日盛んに押しよせて來て、しかも多少の弊害を生じてゐる西洋の文化をも、やがて程よく消化して、りつばに我が物とせねばならぬ。もしこれができたら、我が國民は東西の文化を融合して、これまでどこにも見ることのできなかつた一種の完全に近い文化を作り出すわけだから、その人類のためにする貢獻は極めて大きいといつてよい。

ところが、我が國の國土は元來狭小であるのに、その可耕地は僅に總面積の四分の一に過ぎぬ。そしてこの四分の一に現在の人口を割當けると、人口の密度では我が國が世界第一である。その上、土地の埋藏物では、石炭はその需要を満すのに足らず、石油はなほさらさうであり、工業上最も大切な鐵もその需要の三分の一も産出せぬ。その他、

世一系の天皇をいたゞき、その間一度も外敵に侵略されたことがなく、しかも舊い國であるにもかゝらず、その國民はいつも若々しく、そして、元氣に富んでゐる。「周は舊邦といへどもその命これ新たなり。」といはれた昔の周の國でさへ八百年亡んだ。支那では昔から「三百年にして社稷廢する。」といつて、國家の命數をおよそ三百年と見つもつてゐる。ヨーロッパ諸國の歴史を見てもまたそんなもので、そして、國の亡びる前には必ず國民の元氣が衰へてゐた。こんなことを考へると、我が國民性には特別な長所があつて、我が帝國はどうしても特別な天祐を享け、従つてまた特別な使命をもつてゐるやうである。

明治維新このかた、廣く世界の諸國と交際してその文化を採用し、その間には已むを得ず數回外國とも戰つたが、いつもこれに打克つて益、國民性の優秀を示し、國家の威望を高めて、今日では世界五大強國の列に加はるまでになつた。世界を我が物のやうに思つてゐる白人の眼に、我が國の發展が一種の奇蹟のやうに見えるのは無理もない。しかし、これと同時に、歐米諸國の我が國に對する態度も變つて、今日では我が國運の發展を呪ふものさへあるやうである。

それなのに、我が帝國の四圍の情況はどうだらう。印度、安南・ビルマは相次いでイギリス・フランスに併合され僅に残つてしまふかも知れぬ。最も親密な關係のある中華民國は自主の力に乏しく、列國競争の犠牲に供されようとしてゐる。中華民國が今日のやうに國內の動亂が絶えないと、東洋の獨立國は我が帝國だけになつてしまふかも知れぬ。さうなると、世界はいよいよ白人の物になつてたとひ我が國の安危は氣づかふに及ばぬとしても、その立場の益困難になることはいふまでも

水産物を除くと、満足に供給される天産物は一つもない。我が國土がどんなに天恵に缺けてゐるかは毎年の輸入品總額の約四分の三が原料品または半原料品であるのを見てもわからう。

次に資本もまた豊富ではない。これは、金利の高いことや、常に外債を募つてその缺乏を補つてゐることだけによつても、そのあらましを知ることができよう。また勞力も以前は安い勞賃でこれを得られたが、今日は高價になり、しかも能率はその割合に進まぬ。製鋼事業なども、イギリスの工場では一人でする仕事に、我が國の工場では十人もかゝつてゐるやうな例さへある。その上、技術上・經營上の能力もまだ十分とはいはれぬ。これは我が國が機械・藥品のおもなものをまだ主として外國からの輸入に仰いでゐることによつてもわかる。

私達はこんな事情の下に産業の發達をはからねばならぬから、大いに勇氣を振つて、前途に横たはる多くの困難に打克つ覺悟が必要である。そこで、我が帝國はこれまでその國運の極めてめでたく、その使命の頗る重大なものにもかゝらず、將來に於て益、必要になつて來る産業國として大いに發展向上するには、産業の必須條件である原料・資本及び勞力の三要素に關しては、殆どどの文明列強に比べても甚しく劣つてゐるから、非常に不利な立場に置かれてゐる。その結果、我が産業は歐米諸國のそれに及ばず、年々外國貿易に於ては輸入はいつも輸出に超過して、その上、別途外國から受取る金額もこの損失を埋合せるに足りないから、我が國の富は差引おひ／＼と減るばかりである。とりわけ國土の狭小な割合に人口が多過ぎ、しかもその増加率の他に例のないほど大きいのは、そのために食糧の不足を來し、またこれに伴つてい／＼めんどろな社會問題をひきおこすから、國民

の海外發展によつて過剰人口の捌口を國外に求めることが急務だけれども、これとて我が國だけの思ひどほりになるものではない。更に東西の文明國民を比較して先づ誰の眼にも遺憾に思はれるのは、我が國の女子が概してその貞操淑徳に於て世界に誇つてもよいほどの長所を具へてゐるにもかゝらず、これを國家富強の直接要素として見ると、その體質・氣力といひ、知識・技能といひ、まだなかく西洋女子のそれに及ばぬことである。平生無事の日はそれでもよいとして、一旦緩急のある場合に、國家は今日の女子に果してどれだけの期待をなすことできるだらうか。西洋の女子が近年益々自覺・自重して、已に文化的にも、社會的にも、經濟的にも、また幾分は政治的にも大きな勢力となつて、目覺しく活動してゐるのを見ると、我が國は人力の利用に於てまだ殆どその半分をむだにして、ちやうど半身不隨のやうな状態にあると酷評されても仕方がないのである。こんな點を考へて見ても、我が帝國の前途は決してこれまでのやうにいつもめでたいことばかりだと思つてはならぬ。

今日はあの世界大戦の慘禍に懲りて、永久に世界の平和を維持しようとなつてゐるけれども、一方にはいはゆる國民主義が勃興して、列國間の憎悪はまだ全く掃きさらさうでない。列國が再び戦争の渦中に捲込まれるやうなことはないとしても、少くとも我が國民が極めて不利な位置に於て戦はねばならぬ經濟上の戦争は、今後益々激しくなるものと覺悟せねばならぬ。私達は平生よく世界の大勢の趨くところを注意して、どんな場合にでも、個人としても國家としても、世界の列國との競争に堪へるだけの準備を怠つてはならぬ。この準備を怠ると、我が帝國の使命を全うするどころか、或は天祐に見放されて、今日の

位置を保つことさへできぬやうにならぬとも限らぬ。我が帝國の現状は私達青年男女の發奮興起を切望してやまぬ。私達は常に我が光輝ある歴史の成跡をかへりみ、今上陛下のねんごろな御教を服膺して、その期待に背かぬやうに努めねばならぬ。

湯原元一著(女子修身訓卷五)

#### 四 日本國民の使命と覺悟

一 およそ、國民精神が剛健であつて、それが國家經營の上に力強く働きかけることは、國家興隆の根本條件であります。國民精神の剛健とは我が國家觀念を中心として統一された精神が健全であつて、どんな困難や苦境も打開してゆく強い意志力をさすのであります。然るに、もし、それが不健全であつたならば、たとひ、他の點に於て稱揚すべきものがあつても、我が國家はよく存立し發展することが出来ません。昔は一國の盛衰を判定するに、その兵力や物資を主なる標準としたのであります。尤も現代においても、それらが全く無價値であるとはいふべきでないが、しかし、兵力・物資をして、眞の意義、眞の價値を發揮せしめるものは國民精神であり、従つて、この精神の健全こそは國家盛衰の主因であります。故に、今日は、むしろ、獨自の文化を創造して精神的に充實し、廣く世界人類の福祉に貢獻して行く國民こそ、永く將來ある國民であるといふことが出来たります。これを世界歴史上の事實に徴するも、洋の東西に少からざる亡國を出したのは、いづれもその國民精神の頹廢に基づいて居り、我が國を始め、英・米・佛・伊などの諸國が興隆したのは、その國民精神が健全であるからであります。

二 我が國は建國以來、三千年、その間よく君民一體の國體美を具へ、億兆一心の努力によつて、一意、國家の存立と發展とを圖つて來たのであります。彼の儒教・佛教・基督教などの傳來した時にも、これが爲に我が國民精神は微動だもせず、却つてその探るべきものを採り、その優れたものを同化して、ますます、國家の大本に培つたのであります。また、明治時代に東洋の平和を確保するため、清國及び露國と干戈を交へた時には、剛健・敢爲の國民精神を働かせ、いづれも赫々たる捷利の得、列國環視の前で一躍、世界の一等國に列したのであります。それ以來、我が國は、東洋の文化と東洋の平和とを維持し、以て世界の平和に寄與して今日に及んでゐるのであります。

三 そも、明治維新は我が國未曾有の大變革であつて、もろ／＼の制度・施設は悉く改められたのであります。即ち鎖國三百年の大平の夢から目覺めて、一たび歐米諸國と交通を開き始めるや、その思想・文物は恰も黒潮のやうな勢を以て、我が國上下の人心を動かし、何事にも歐米の模倣にはしり、西洋禮讃の聲が遍く都鄙に充ちたのであります。更に極端な例を挙げると、一部急進派の人々は歐米の文物に心酔し、その結果、一方には在來の風俗・慣習・文物はあたかも弊履の如く蔑視せられ、神道を始め、儒佛二教は無權威となり、他方には徒らに自由を説き、民権を叫び、遂に建國の精神に戻り、君臣の大義を忘れ、あらゆる自國の美點・長所を滅却し盡さうとする者さへ現はれたのであります。然るに、また一部保守派の人々はこれに對抗して、忠實に古來の傳統を守り、飽くまで歐米の文物を排斥して、専ら封建時代の古にこそが、世界の大勢に逆行して、國家の進運を妨げたのであります。この急進・保守二派の論争はますます、我が國民思想

を混亂せしめ、教育者は論なく、國民の殆んどすべてはその去就と歸趨とに迷つたのであります。この時、日本主義を力説し、我が國粹を發揮すべしと主張して、歐米文物に心酔してゐる人々の覺悟を促した者もあつたが、しかし、依然として世論の統一を見るに至らなかつたのであります。畏くも明治天皇には深くこれを軫念あらせられ、今にして國民教育の大本を確立しなければ、我が國の前途は洵に寒心堪へぬとの大御心から、明治二十三年十月三十日、教育に關する勅語を下賜して、國民教育の大本と國民道德の要旨とを明示したまうたのであります。我が國民はこの勅語を拜して宛も暗夜に炬火を得、大海に羅針盤を惠まれた心地して、卒爾として己が率由すべき大道を知り、當然として國民教育の大本を覺ることが出来たのであります。

四 我が日本國民の守るべき正理、行ふべき大道を明示し給うた教育に關する勅語は、實に國民の一大寶典であつて、私たちの深く服膺し奉るべきものであります。人の踐むべき道は少くないであらうが、しかし、我が日本國民に取つては、教育に關する勅語に宣へる「斯ノ道」ほど貴いものはありません。否「斯ノ道」は世界人類の公道であつて、これを道德の理論と實際との上から考へても、何ら缺けるところがないのであります。それ故に、私たちが「斯ノ道」を實踐することによつて、始めて我が國民精神を振作し、國家永遠の發展を圖ることが出来るのであります。教育に關する勅語が漢發して以來、こゝに四十餘年、無窮に發展すべき我が國運はいよ／＼その堅實を加へて來たのであるが、世界大戦後、はからずも謂はゆる危険思想が傳來し、祖國の煩累を加へつゝあります。私たちは朝夕この聖旨を奉體して、斷じて危険思想の動かすところとならず、日本婦人としての本務を完

うしなければなりません。

五 そも、我が日本國民の使命は果して何でありませうか。それは私たちが皇室を中心として、理想的國民たる實を擧げて、光輝ある日本精神と日本文化とを、廣く世界に光被せしめることでありませう。世界の各國はそれ、異なつた歴史と特殊の文化とを有つてゐます。私たちは、他國の美點・長所は進んでこれを採入れて我が缺點・短所を補ひ、而も我の優れた特長はいよいよこれを發揮して日本精神に培ひ、日本文化を完成し、これを他國に及ぼさなければなりません。否、我が國民は、更に進んで東西文化の長所を融合・調和して理想的な世界文化を創造し、これを内にしては更に祖先の遺風を顯彰し、これを外にしては廣く世界人類に貢獻すべきであります。然るに、我が國が精神的並に道徳的方面に幾多特長のある文化を有することに氣づかず、却つて西洋の物質本位・個人本位の文化を歡迎して、その弊害に累はされる者の如きは、ただに日本國民の使命を知らないばかりでなく、自己の人格を潰すことの甚だしい者であります。

六 なるは、私たちが日本國民としての使命を果すには、外國との交際に注意し、列國と親善・協力しなければなりません。今や、旅客飛行機關が汽車・汽船に代らうとし、世界各國の距離が頗る短縮され、外國人の來朝する者が年々多きを加へ、また我が國より海外に赴く者も次第に多くなつてゐます。外國人は私たちと言語・思想・感情・風俗・慣習などを異にするのみで、人類としては全然同等であります。されば、私たちが國內または海外において、個人として外國人と交るには専ら信義・親切を旨とし、好意を盡くし、禮儀・作法を守つて國民の品位を保ち、ますます國光を輝かすべきであります。

七 また、國と國とは互に修好・通商して、親善關係を結んでゐるから、教育に關する勅語に仰せられた「斯ノ道」を廣く國際間に及ぼして、世界の平和、人類の幸福の爲に寄與する覺悟がなければなりません。

明治天皇が日露戰役中に

よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらむ

と詠じたまうたが、時の米國大統領ルーズヴェルトがこの御製の英譯を捧讀していたと感動し、兩國講和の爲に奔走したと傳へられてゐます。思ふに、一視同仁、以て世界の平和を愛好せられるのは、實に我が皇室の御傳統であります。この故に、私たちは國際正義を重んじ、世界恒久の平和の爲に一致・協力すべきであります。

八 最後に、私たち日本國民として知るべきことは、今日國際間の經濟的競争の激甚なことであります。かの世界大戰に際して列強の受けた創傷は今なほ癒えず、列國は競うて自國の經濟復興に努力しつゝ、あるがゆゑに、國際間の經濟的競争は今後ますます激烈の度を加へるものと見なければなりません。この故に、私たちは平素よく内外の經濟事情に注意して、個人としても、國家の一員としても、この激烈なる經濟的競争に善處する用意が必要であります。殊に、有爲な青年をして、遠く海外に進出して十分に雄飛させる爲には、女子はその伴侶として努力する覺悟がなければなりません。もし、女子にして海外進出の勇氣を缺いたならば、この皇國の十分なる經濟的發展は到底これを期待することが出来ないのであります。私たちが海外に進出するのは、要するに、「東西相倚り彼此相濟」す以外、更に他意がないので

あります。我が國の現状を直視する時、次代の日本の運命を擔ふべき私たちが青年女子の責務は如何にも重大であることを知つて、大いに覺悟するところがあればなりません。

深作安文著(現代女子修身卷五)

昭和十一年六月二十五日印刷

野田義夫著

昭和十一年六月二十五日印刷  
昭和十一年六月三十日發行

〔野田修身書教授參考〕

非賣品

不許複製

著者 野田義夫

大阪市西區京町堀上通一丁目十六番地

發行兼印刷者 田口繁藏

發行所

大阪市西區京町堀上通一丁目  
掘替穴阪二一九四五番  
電話土佐堀二八七八番

精華房

終

